期ヤップ島で続発しました肺病の菌を持って帰ったのでしょうか、復職しましてから肺病を患いました。

その後回復し八十四歳の今日まで元気でがんばっております。

ヤップ島　命捧げし　戦友の顔
瞼に浮び　涙溢るる

トラック島大空襲の脅威

大分県　羽田野　正　士

「天に代りて不義を討つ忠勇無双の吾が兵は」の軍歌に送られて、若い人達が御国のためにと出征して行きました。

昭和十二（一九三七）年七月七日、支那事変が勃発し、十六年十二月八日未明には真珠湾攻撃により太平洋戦争が始まり、私達の住む小さな村からも次々と赤紙召集により青壮年の方々が出征して行きます。

私は、大分県大野郡上井田村池田という部落で、大正十三（一九二四）年十二月三日、農家の長男として生を享けました。昭和十四年三月、大恩寺小学校の高等科を卒業すると、家族は祖母を含めて十一人の長男でありましたから、両親を助けて家の農業の手伝いをしながら青年学校に通いました。時代が時代だけに村役場の兵事係の方が「若

い者は一日も早く志願して御国のために役に立たねばならんぞ」と、再三志願を奨められますので、両親に相談した。

父親は五十年配の働き盛りでもありましたので「お前がいなくなると早速困るが日本のために早く行って早く帰ればよかたい」と許してくれましたので、昭和十七年八月、海軍を志願致しました。即日合格が決定しました。家に帰って報告しますと両親も喜んでくれました。「ようし海軍の水兵として御国のために頑張るぞ」と思いますと、何だか三歳ぐらい成長したような気分になりました。そして妹六人、弟が一人でしたから、入団するまで一生懸命家業に働きました。

七カ月は「あっ」という間に過ぎ、昭和十八年四月二十日、佐世保海兵団に入団する日が来ました。四月二十日大分駅に十時集合でしたので、十九日には大分市内の親戚の家に泊りました。当日、大分駅には県内各地から集まった人で大混雑で、盛大な見送りには感激の涙が溢れました。万歳の声に送られて大分駅を出発した軍用列車は十二両、久大線経由で佐世保駅へ直行し、佐世保駅から海兵団まで歩いて入団しました。海兵団では早速身体検査が行われ五人の者が不合格となり帰郷となりました。私は航空隊の整備を希望し、三カ月一期の検閲まで鍛えられました。

七月二十五日、海軍一等整備兵を命ぜられ、同日付けで大村海軍隊付を命ぜられ、船で佐世保港より大村湾に入り大村海軍航空隊に移動しました。ここでは実戦の訓練を教育されました。九月六日、第五五一海軍航空隊付を命ぜられ、九月八日千葉県の木更津航空基地に転属し、十月八日まで航空機の整備兵として整備作業と教育を受けました。

当時、南方各地でアメリカ空軍との戦闘が激しくなり、いずれ私達も南方の第一線へ派遣されるものと覚悟は決めておりました。木更津航空基地には大村からは私一人でしたが、ここには全国から整備兵が集まりましたので何かあるなと思っておりますと、南西方面へ移駐を命ぜられ、十月九

日、横須賀港に移動、待機中の航空母艦「千歳」に乗艦、駆逐艦三隻に護衛されて横須賀港を出港しました。いよいよ第一線へ行くのかと思いますと身の引締る思いがしました。

当時は日本の艦船が米国潜水艦に撃沈されていましたので、駆逐艦三隻の護衛は大変心強く思いました。幸い襲撃を受けることなく目的地セレタ空軍基地に到着しました。そして私はセレタ空軍基地からシンガポールに空軍機で移動しましたが、他の整備兵は船でシンガポールに集合し、一週間滞在し、航空機の整備等の手伝いをしました。この地方は気圧の変動により竜巻が起ることがあり、天候は不順な土地でした。私達がアンダマン列島に移動した直後、私はマラリア病に罹り、コタラジヤ海軍病院に入院しました。

昭和十九年一月十八日、航空母艦に乗艦しコタラジヤ港を出港しました。今度も駆逐艦三隻が護衛してくれましたが米国空軍機と潜水艦の攻撃を避けるために昼間は島影に隠れ、夜のみ運行するので遅々として進まず、ようやく二月十一日、十七の島からなるトラック諸島の一つの島、竹島に上陸することになりました。ここではシンガポールから二百人ぐらいの人員が上陸し竹島飛行場へと向いました。椰子の葉茂る竹島はとても美しい平和な島で、軍艦の停泊地としても最適でしたので、海軍基地として約五万人ぐらいの陸海軍部隊が配備されていると聞きました。私達が上陸した時は日本人は引揚げた後で、原住民とドイツ人が他の二つの島に住んでいるとのことでした。

大正三年、日独戦争が始る前はドイツ領土であったものを、日独戦争によって日本の委任統治領となったもので、当時のドイツ人はそのまま住んでいるとのことでした。その平和な島は珊瑚礁に囲まれ南水道一カ所が港の入口になっているので、敵潜水艦を防止するのに最適の港でもありました。そして竹島には飛行場もあり立派な兵舎もありました。

兵隊は上陸しましたが、軍艦から武器、弾薬、

物資、食糧品を荷揚げするための団平船がなく、船に積んだままの状態でした。アメリカ空軍機が時折高空で通過しますのは監視のためでしょうか。

上陸して七日目の二月十七日三時四十分ごろ、突如大空襲を受け大騒動となりました。アメリカ空軍のグラマン機が次々と飛来し、飛行場の日本の航空機や港の軍艦目掛けて爆弾投下と機銃掃射は雨霰のごとく、その物凄さに逃げ惑うばかり、反撃しようにも武器弾薬は軍艦に積み込んだまま、航空機は燃え盛り、初めての経験に機銃掃射を避けて逃げ回るばかりでした。

グラマン機がイナゴの大群のように波状攻撃を繰り返し、十八日、十九日と三日間の大空襲に飛行場は穴だらけ、島が変形するほどで、兵舎も倉庫も燃え上がり、戦死者の死体もゴロゴロ転がっています。グラマン戦闘機の数は分かりませんが、次々と間断なく飛来し爆弾投下と機関銃掃射の壮烈さと悲惨さは筆舌に尽くし難い状況でした。

空襲の終わった後の整理と後片付けは手の付けようもないぐらいみじめなものでした。十七日、十八日、十九日の三日間の大空襲により三年分の食糧も失い、大砲、弾薬も軍艦と共に海の底、この日以来食べ物もなく、敵機が来ても無抵抗、病気になっても医薬品なし、終戦までアメリカ軍のなすがままで手も足もでませんでした。

大空襲の後は、数は少なくなりましたが毎日空襲は続き、その合間を見て食糧探しで食べれる物は何でも奪い合って食べました。幸い野生のさつま芋が自生していましたので、それを栽培することになりました。その間に栄養失調者が続出し、朝起きたら死んでいる、その死体の始末が大変でした。珊瑚礁のため穴が掘れませんので毛布に包んで椰子の葉を頭に乗せて踏まないようにする、後はうじが湧いて白骨となる、まことに憐れなものでした。

椰子の実、バナナ、マンゴーの果物はもちろんのこと、トカゲ、ネズミ、食べられるものは何でも食べました。病気もマラリア、チフス、赤痢と

抵抗力がないので次々と病気に犯され死んで逝きました。出ない声をふりしぼって「お母さん」とかすかに叫んで息が切れてゆく、その姿を見ていると次は我が身かと何度思ったか知れません。

十七の島がありますので、それぞれの島でも同じような状況であったろうと思いました。これが、かつては日本海軍の精鋭といわれた人達の最後の姿だろうかと、余りにも憐れで可哀相でした。この姿をご遺族が見られたらどんなに悲しまれるであろうかと何十回思ったか知れません。年輩の方、特に補充兵の方々から死亡されました。軍紀どころか立てずはって行動せねばなりませんでした。

海には魚もおりますので魚獲りもして食べました。沖縄出身の人達は泳いで潜り魚を獲って来てはみんなを喜ばせました。ダイナマイトを海に投げますとたくさんの魚が浮いてくるのでダイナマイトを使用しましたが、このダイナマイトのため海に潜っていた者が逃げ切れずに多くの人が死にました。昭和十九年六月六日、私は急性気管支炎で第四海軍病院に入院し治療を受けました。

十一月十七日の大空襲により立派な兵舎も破壊炎上したため、バラック建の兵舎を急造しそこに寝泊まりしましたが、毎日来るスコールの後は寒く、熱発者も増加しました。食べる物は芋ばかりで栄養が摂れず種々の病気を発生させました。入院しても軍医だけで看護婦は一人もおりません。二十九日に退院しましたが食事は芋ばかりで、栄養不足により六十キロあった体重も減少するばかりで、八月十五日脚気と診断され、また第四海軍病院に入院しました。病状は軽く、十日後の八月二十五日に退院しました。

そして毎回アメリカ空軍機は思うままに爆弾投下をし、我々は反撃する術もなく無念の涙を流すばかりでした。栄養失調で病人は増加するばかり、死人を抱えて移送にもひょろひょろして抱きかかえることが出来ませんでした。航空整備兵も航空機は無くて何もすることもなくただ走り回りの出来ない身体を嘆き、空を眺めて無念の涙を流す私

達でした。

そして私は、再びアミーバ赤痢に罹り、昭和二十年四月十七日から第四海軍病院に入院し、五月十六日に退院しました。退院出来る者はまだ幸で、栄養失調で苦しみながらひっそりと死んで逝く戦友達はまことに憐れです。そして死体のあちこちには蛆が湧いている姿を見ると、戦争の無残さを身にしみて感じ誰も恨みようもありませんでした。

着ている軍服もぼろぼろで着替える衣服もなく、バラック建の建物の中でごろごろしているばかりで、食事の時間になれば歩けないのではって食事に行く状態、正に戦争どころではありませんでした。はっても行けない者は死を待つばかりで、私の知った戦友達も十数人一言も言わず死んで逝きました。正にこの世の生地獄の状況での苦しみでした。顔を洗うにもタオルもなし、体中しらみ攻め、うようよしているが取ってつぶす元気もない有様で、このしらみは復員して家まで持って帰り大騒ぎしました。

昭和十九年七月七日、サイパン玉砕、九月二十七日、グアム島とテニアン島が玉砕しますと、アメリカ空軍と機動部隊は南方の島々の日本軍をしらみつぶしに攻撃を開始し、十一月十七日から三日間トラック島大空襲を開始したわけです。

終戦を知らされたのは八月中旬、ヤップ島の本部からの電話によって終戦になったと、上司から知らされました。最初は「デマ」だろうと騒ぎ立てる者もいました。ああこれで日本に帰れるかとほっとする反面、こんなに苦労したのに敗けたのかと残念でした。八月にアメリカ空軍機の来襲も少なくなり、不思議には思っておりましたが、矢張りそうだったのかと思いました。

私のように志願して来た若い者はなんとか生き延びることが出来ましたが、年輩の人達は食べ物がなく栄養失調でほとんど死亡されました。

連日空襲で悩まされる心配がなくなりましたので、気分的には楽にはなりましたが、今まで考える暇もなかった日本のこと、故郷に思いを馳せ、

望郷の念に駆られました。終戦の報をうけましてからも、アミーバ赤痢やチフス、マラリアで死亡する人達が後を断ちませんでした。食糧、医薬品の補給が断たれたために、尊い命がどれほど失われたのでしょうか。

第一回目の復員船には病人が優先的に乗船させられ帰られました。私達は二回目の復員船として迎えに来た駆逐艦に百人ぐらい乗船し帰ることになりました。

十一月七日、いよいよ島を離れるとなりますと、一年十カ月苦労した島だけに離れ難い島にもなり、日本へ帰れる喜びと重なり、いいようのない淋しさでした。そして「お先に帰ります元気で皆さん帰って下さい」と手を振りました。遠くなる島々を見ながら、あの美しい島々に上陸する時の気持ち、六日間の平和であった島が一週間後に地獄の島に変ろうとは誰が予期したでしょうか。戦争の悲惨さを思い起し、甲板から見えなくなるまで手を振りました。

駆逐艦の中は百人でしたがすし詰めで、甲板に急造してあった便所は途中、台風で吹き飛んでしまうというハプニングもありましたが、帰れるという喜びで皆辛抱して艦内生活を過しました。

「富士山が見えたぞ」との声で甲板に出て見ると、雪を頂いた美しい富士山を見た時、日本に帰って来たと言いようのない嬉しさがこみ上げて来ました。

十一月十七日横須賀港に入港、昭和十八年十月九日、航空母艦千歳で出港したなつかしい横須賀港は、寒くて震えました。半袖半ズボンの南方服そのままでの十一月の日本帰還でした。上陸して復員宿舎に入りましたが着る服とシャツが揃わず困りました。それでもゆっくり日本の食事が食べられて嬉しい毎日でした。

一週間してやっと服装が整い、故郷へ帰る許可が出て、もらったリュックサックを一つ背負い、戦友達に別れを告げ、それぞれの復員列車に乗車しました。車窓から見える荒れ果てた故国日本の

姿に日本の勝利を願って一億玉砕と頑張ったのにと口惜しさいっぱいで、過ぎ行く景色を眺めて帰りました。

十一月十九日、懐かしい故郷の駅から、痩せ衰えた体を鞭打つようにして我が家にたどりつき「ただいま」と家に入りますと、誰もおりませんでした。時期的にあっ唐芋掘りかと思い、仏壇に手を合わせました。

畑から帰って来た両親たちが私の元気な姿を見て喜んでくれました。入隊する時六十キロあった体重が三十八キロとなった体を見て「こんなに痩せて苦労したろう」と心配してくれます。トラック島での状況を話しますと「よく生きて帰ってこれたねえ」と褒めてくれました。

そして四回入院しましたが九月一日付けで海軍二等整備兵曹に任ぜられたことも報告しました。両親達は「当分ゆっくりして長生きするがよいぞ、畑のことはみんなで頑張るからな」といってくれました。

トラック島での一年八カ月の無理がたたったのか、家へ帰って来た安心感からか、体がだるく三年ぐらい仕事が出来ませんでした。家の中でぶらぶらしながらも、トラック島での三日間の大空襲の脅威が頭から去らず、栄養失調で次々と死亡された人達の顔が浮んで来て眠れぬ夜もありました。

後で分かりましたが、トラック島はアメリカ海軍機動部隊の九次にわたる艦載機による大規模な攻撃を受け、日本軍約六千人が戦没し、艦船五十二隻、飛行機百八十機が撃破されたとのこと、二月十七日からの大空襲がいかに激しかったを物語っております。

あの大空襲の脅威は、私が死ぬまで頭から去ることはないでしょう。